The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヒンディー語である理由 : チェータン・バガトの仕事から
Author(s)	松木園, 久子
Citation	印度民俗研究. 2016, 15, p. 127-150
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヒンディー語である理由
―チェータン・バガトの仕事から―

松木園　久子

チェータン・バガトとインドの今

英語作家チェータン・バガト(Chetan Bhagat)が現在インドで大きなブームを巻き起こしている。ある意味、今日のインドを象徴する存在といってもいいだろう。「インド史上最も売れる英語小説家」というフレーズは、わずかデビュー4 年目にニューヨークタイムズ紙に掲載され [1]、今なお彼の代名詞のように用いられている [2]。その彼にヒンディー語で執筆するという一面があることは注目に値する。英語で書きながらインドの在地語で話す作家は珍しくはないが、両方の言語で執筆するとなるとそう多くはない。バガトはどのように英語およびヒンディー語を使っているのだろう。どのように両言語を使い分けているのだろうか。なぜヒンディー語で書くことを決断し、また何を書いているのだろうか。小稿では、これらの点を小説や新聞のコラムなど彼の書いた文章から考察していきたい。

改めて、チェータン・バガトとはどんな作家なのだろうか。冒頭で彼を「売れる」作家と紹介したが、実は「評価が高い」作家とは言いがたいのである。彼の登場以前から英語小説はすでに「売れる」ジャンルになっていたが、かつてはイギリスやアメリカなどで文学的に評価され、ヒットしてから、後発的にインドでも売れるパターンが目立っていた。著名なサルマン・ラシュディやアルンダティ・ロイをはじめ多くの作家が、たとえば権威あるブッカー賞を受賞、またはノミネートされたという経緯がある。しかし最近では、重厚な文学作品というより娯楽作品と呼ぶべき軽い読みものがインド国内でミドル・クラスの若者を中心に流行しているのだ [3]。バガトも自ら「書評家全員から嫌われている」と語

---

[1] “An Investment Banker Finds Fame Off the Books” The *New York Times* 26 March 2008.

[2] デビュー以来バガトの作品を発行してきた出版社 Rupa & Company から筆者が聞いた話では、累計で 1.000 万部以上売れているとのことだった(2015 年 2 月現在)。

[3] 2014 年および 2015 年にデリーで筆者が行った読書にかんするアンケートの結果、「好きな作家」の第 1 位はバガトであり、10～20 代の回答者のうちおよそ 3 割が彼の名前をあげた。ちなみに 2 位はヒンディー語作家のプレームチャンドで、回答者数はバガ

っているように [4]、必ずしも文学として認められているわけではない。それでもなお桁外れに売れているのが現状である。彼の作品の主人公はいずれもミドル・クラスの若者で、恋愛や友情、学校の成績に仕事といった彼らの日常の喜怒哀楽が描かれる。そして、このようなテーマに共感や興味を抱きやすい、いわば作品世界に近いインドの若者が買い、読んでいるのだ。その過程も実に今日のインド的状況といえる。具体的にみれば、作品が若者の間で流行や話題となり、SNSを使って宣伝活動が行われ、書店のほかオンラインでも販売される。バガト自身も 2014 年に新作を売り出す際、新聞、ユーチューブ、ツィッター、フェイスブックを利用してタイトルを発表したり、大手通販会社フリップカート(Flipkart)のサイトで割引価格での予約を受け付けた [5]。さらに発売後も瞬く間に作品へのコメントがソーシャル・メディアに投稿されている [6]。近年インドで発行されるペーパーバックは、安価でありながら、紙質も活字も高品質で、装丁のデザインも洗練されている。このような商品としてのファッション性の向上も、英語小説の人気の一因と考えられる。バガトの作品はこのような今の若者たちを描き、彼らがまたバガトの作品を消費するという関係ができているのだ。

バガトの活動は英語小説にとどまらない。ボリウッド映画の脚本を書き、テレビのダンス番組では審査員をつとめ、SNS からメッセージを発信するなど、活躍の場はさまざまなメディアにまたがる。一方講演や新聞のコラムでは、若者を鼓舞する演説、現代の社会問題にかんする提言、政治批判などを精力的に行っている。

トの約半数だった(複数回答による)。なおこのアンケート結果は、NIHU プログラム現代インド地域研究における INDAS ワーキングペーパーとして公開予定である。

[4] “An Investment Banker Finds Fame Off the Books” The *New York Times* 26 March 2008.

[5] "नए नॉवेल 'हाफ गर्लफ्रेंड' के साथ चेतन ने दी दस्तक" (チェータン・バガト、新作『ハーフ・ガールフレンド』で殴り込み) *दैनिक भास्कर* 5 August 2014.

[6] "मज़ाक उड़ाना है तो उड़ाओ: चेतन भगत" (笑いたければ笑え：チェータン・バガト) *दैनिक भास्कर* 18 August 2014.

こうした側面をあわせて考えると、稀有の文学的才能に恵まれて身を立てた作家というより、現代のネットワークを駆使する、「時代の申し子」的人物像が浮かびあがるのである。

次に彼の経歴を簡単にたどっておこう。インドにおいて英語で執筆する作家の教育レベルが高いことは必然であるが、バガトもまた、IIT(インド工科大学)からIIM(インド経営大学)といった難関校を経て、外資系投資銀行に就職した、現代のエリートである。1974 年にパンジャービー系のミドル・クラスの家庭に生まれた彼は、デリーに育つ。両親は公務員だったが、家庭は常に金欠状態で、彼はまともな仕事(decent job)に就くことを強く望んでいた。子どもの頃からジョークで人を笑わせることが好きだったが、やがて受験勉強に専念することになる。猛勉強の末、名門IITデリー校に入学した 1991 年は、インドが経済自由化路線に踏み出した年でもあった。IITでは学問よりも人間に興味を持った彼は、MBA(経営学修士号)を取得するためにIIMに進学する。小説*Five Point Someone*はIITを、*2 States: The Story of My Marriage*はIIMをそれぞれ舞台にしており、彼自身の経験や人間観察が反映されているのだろう。卒業後は香港を拠点とする投資銀行に就職するが、その 1997 年もアジア通貨危機に重なっている。香港では 10 年以上過ごすことになるが、そこでの先進的な生活にカルチャー・ショックを受け、外からインドを見つめる契機となったようだ。執筆活動を始めたのもこの間であり、「気晴らしのためかもしれないし、再びインドとつながりたかったためかもしれない」と回顧している(*WYIW* xvi) [7]。デビュー作*Five Point Someone*は 9 社に断られるものの出版後は大ヒットとなり、一躍ベストセラー作家の仲間入りを果たす。2009 年に銀行を退職して、妻子とともにインドに帰国。現在はムンバイに在住している。

小説のなかの言語——表記されない存在

バガトは英語で小説を書いている。しかしそれは、登場人物の語る台詞、聞いている音楽、街の喧騒や看板が全て英語であることを意味しない。むしろその世界ではヒンディー語やタミル語、

---

[7] 以下、*What Young India Wants* からの引用では書名を *WYIW* と省略する。

その他のインドの在地諸語が欠かせない柱となっている。英語を用いて在地語世界を表現することは、当初からインドの英語作家にとって大きな課題であり続けている。これまでもさまざまな手法が生み出され、作家の個性や可能性が発揮されてきた。バガトの場合、英語小説のなかでどのようにヒンディー語世界を構築しているのだろうか。

分析に入る前に留意したいのは、英語小説に描かれる世界であっても、当然ながら英語と在地諸語の比重は一定ではないということだ。たとえば舞台がエリートのコミュニティか農村かによっても異なるし、さらには、話し手、場所や場面、発言の目的などの要因にも左右される。また単に分量だけで言語の重要性を測ることもできない。たった一言でも印象深い言葉はあるからだ。以降では物語の設定や場面も踏まえながら、ヒンディー語を中心に、小説のなかで彼が描いている言語を検討していきたい。

デビュー作 *Five Point Someone* (2004)は、一言でいえば、ヒンディー語がほとんど感じられない作品だ。舞台の IIT があるのはデリーだが、ここには非ヒンディー語地域を含むインド全土からエリートが集まり、こと理系の授業においては英語のみが使われていても不思議ではない。しかし、主人公の学生たちはヒンディー語の映画を観たり、音楽も聞いており、ヒンディー語とまったく無縁な生活を送っているわけではない。それでは具体的に小説のなかから、ヒンディー語と確認できる表現を抜き出してみよう。まず大半は料理や衣服の名称で、ローマ字で表記されるものである。これらは英語に相当する語彙のない、いわば固有名詞のようなものだ。映画のタイトルや歌の歌詞もヒンディー語のままだが、やはり英語には翻訳不可能である。このように語彙のレベルで在地語を挿入する手法は、これまでもインドの英語小説のなかで行われてきた最も一般的なものである。バガトの小説全てにもみられるが、これから確認するように、そのジャンルは次第に増えていくことになる。では次に、ヒンディー語が話された形跡を探してみよう。どの台詞も全て英語であり、そこに yaar (友)や beta (息子)、bhaiyya (兄さん)といった人間関係を表す語が入る。これらはまた親しみを込めて呼びかけにも用いられる言葉だ。ここで注目したいのは、どこにも言語名が表記されていないことである。インドの英語小説では、たとえば「ヒンディー語で言っ

た」(He/She said in Hindi.)のように使用言語を補足する記述がよくみられるが、この作品にはそれが一切ない。再度設定を検討してみよう。IIT は除いても、大学近隣の村人や、ある学生の貧しく、エリートとは考えがたい家族は、ヒンディー語で発言している可能性が高い。彼らの台詞が少ないためか、発言していてもやはり言語の指定はない。また一方で、「英語で言った」という表記も存在しないのだが、いくつかの台詞は前後のやりとりから英語と判断できる。つまり、この作品ではよほど設定を意識しておかなければ、活字の上で「ヒンディー語」の存在を感じることは困難なのだ。

続く *One Night @ Call Center* (2005)ではタイトルの通り、コールセンターが舞台となる。アメリカの家電メーカーの下請としてアメリカから電話を受けるため、そこでは「英語」が重要であり、アクセントに至るまで詳細な描写がなされている。どんな英語を話すかが、若者の間である種のステイタス・シンボルになっているという側面もうかがえる。対照的に「ヒンディー語」については、前作同様ほとんど存在感がない。この作品でも設定を考えてみれば、ヒンディー語が皆無のはずはない。コールセンター自体がデリー郊外にあるし、そこで働く主人公の若者たちは周辺地域に住んでいる。彼らが英語に偏るのはともかく、少なくとも家族や会社の運転手にたいしてはヒンディー語で話すこともあるだろう。それでもやはり表記から認識できるヒンディー語は、依然として料理や衣服の名称であったり、前作と比べても敬称や呼びかけに用いられる sahib や ji といった語が加わったに過ぎない。

The 3 Mistakes of My Life (2008)では、舞台が前 2 作のデリーからグジャラート州アフマダーバードへと移る。クリケット好きの 3 人の若者が地元の町でクリケットの用品店を営みつつ、近所の少年をクリケットのスター選手に育成する夢を追う物語だ。この間、町は自然災害(2001 年の大地震)やテロ事件(2002 年の列車爆破テロ)など深刻な災禍に見舞われることになる。宗教間摩擦が悪化するなかで発生したテロ事件を機に、ムスリムである彼らの秘蔵っ子はヒンドゥー教徒たちの攻撃の標的となるが、3 人は命がけで守り抜いていく。さて言語については、この町でふだん人々が話しているのはグジャラーティー語であり、この作品ではヒンディー語が現れないのは自然であるため、ここではグジャラーテ

ィー語に焦点を合わせる。全編を通じて「グジャラーティー語で」と特定されている場面は 1 ケ所だけである。それは、若者たちが来印中のオーストリア代表のクリケット選手に会おうとして、スタジアムの警備員をだますために、インド最大のスポーツ用品会社の社長のふりをするときだ。商談を装った電話を「グジャラーティー語で」かけ、警備員たちと「グジャラーティー語で」話している。この場面でのみ特記されているのは、大会社の社長なら普通は英語で話すはずだが、グジャラーティー語を使っていることを強調するためだろう。これ以外の、町の人々の日常会話にたいしては、言語名は触れられていないのである。語彙としてはこれまでのヒンディー語の例と同じく、料理や衣服に加えて、mehmaan「お客」や inaayat「ようこそ」といった語や、ムスリムが用いる Khuda Hafiz「さようなら」と Inshallah「そうでありますように」などの表現である。英語にかんしては、オーストラリアのスラングを若者たちが学んでいく様子がユーモラスに描かれている。以上、バガトの初めの 3 編の小説においては、在地語の存在が極めて希薄な世界であり、あえて意識しない限り、読み通すには障害とはならないといえる。

言語を意識する——外部への視点

英語および在地諸語について意識的な記述がみられるようになるのは、4 作目 *2 States: The Story of My Marriage* (2009)である。再びバガト自身の体験に重なる、学生生活とその後同級生と結婚に至る紆余曲折を描いた物語だ。親元を離れた IIM アフマダーバード校での学生時代は恋愛も飲酒も思いのままで、主人公クリシュの出身地デリーとも恋人アナニャーのチェンナイとも離れた、第三者的な空間であった。しかし結婚となるとさまざまな問題が浮上する。そもそも出身コミュニティが異なるうえ、互いのコミュニティにたいする偏見や、両親が抱く子どもの結婚にたいする要望が二人の結婚を阻む。そのような両家の軋轢を象徴しつつ、またそれ自体が障害となるのが、言語である。クリシュの母語ヒンディー語は程度の差はあれ全国的に理解されるものだが、アナニャーのタミル語は違う。主人公兼語り手にとって未知の世界であり、意識せざるを得ないものだ。そこでまず、タミル語の描き方に注目してみよう。

まずローマ字表記でタミル語の名称が使われている例をあげると、やはり料理や衣服そして呼びかけとしても用いられる親族名称である。この作品には南インドの音楽や楽器も含まれ、さらに地方特有の慣習や儀式なども言及されている。たとえばクリシュとアナニャーの会話を引用してみよう。「……母は明日のヴァルシャ・ポルプの礼拝のために買い物に出かけているの」「ヴァルシャ何だって？」「ヴァルシャ・ポルプよ、タミルの新年」('… She's gone to buy stuff for *Varsha Porupu* puja tomorrow.' / '*Varsha* what?' / '*Varsha Porupu*, Tamil new year.') (54-55)というように、会話の流れで *Varsha Porupu* の意味が読者にも分かるようにできている。このように会話文や、あるいは地の文で補足するパターンは、従来の英語作品にもみられるものである。さらにタミル式の結婚式の作法については、さらに詳細な説明がなされる。つまり、語り手にとって説明が必要な「異文化」なのである。このような文化案内的な記述は、異国情緒を醸し出す効果もあるといえるだろう。

さて、この小説で「タミル語で言った」という記述がなされるとき注意したいのは、単に使用言語が明らかになるだけでなく、そこに登場人物の心情が表れていることである。たとえば会社の配属で初めてチェンナイを訪れたクリシュは、タミル語の文字にも発音にも違和感を覚え、オートリキシャとの運賃交渉にすら苦労する。まるで初めて訪れた外国のように、彼にはタミル語世界が「異質なもの」に映っているのだ。また、恋人や家族がタミル語で話していると、内容が理解できないことと交際を認められていないことの相乗効果で、彼の疎外感は一層強まる。しかしさらに厄介なのは、まったく理解できないのではなく部分的に理解できる場合だといえよう。象徴的な一場面をあげてみよう。初対面から気まずい雰囲気だったクリシュの母親とアナニャーの両親が、二人の提案で観光に連れ出されることになる。訪れたガンディーの道場で歴史的な「ダンディー海岸への行進」の説明を聞き、クリシュの母親は地名の「ダンディー」を知らずに、発音の似たヒンディー語の単語「杖」だと勘違いしてしまう [8]。するとアナニ

---

[8] 参考として、地名「ダンディー」のヒンディー語表記は दांडी、「杖」は डंडी である。

ャーの母親が夫に向かって、タミル語で話すのだ。「なんとかかんとか、イッラ、知識、パンジャーブの人々、なんとか」(‘Something something illa knowledge Punjabi people something.’) (51) さらに続けて「知的にも文化的にもゼロ。なんとかかんとか、がさつで、学がなくて、なんとかかんとか」(‘Intellectually, culturally zero. Something something crass uneducated something.’) (51) 語り手でもあるクリシュが理解できないタミル語は‘ something’とされており、illaという否定語だけは認識されている。聞き取れた部分から推測すると、どうやら自分たちは見下されているようだ。完全には理解できないが、問いただせる関係でも雰囲気でもない。クリシュはアナニャーの母が「英単語を使っていることに気づいているのか、わざと交えているのか、分からない」(51) という板挟みの状態のまま､悶々とやり過ごすしかないのである。言葉の使い方と心理描写を絡め合わせた、実に巧妙な表現といえるだろう。ささやかではあるが、人々の心理や人間関係の複雑さを象徴し、このような発言がさらに事態を悪化させることを示唆する興味深い場面である。

他の言語についてはどうだろうか。この物語でも「英語」にはある大きな役割が与えられている。ある時二人はクリシュの親戚の結婚式に出席するが、新郎の家族は新婦側が用意した贈り物にたいして難色を示し、あわや破談かという場面に出くわす。義憤にかられたアナニャーは新郎に詰め寄り、彼自身の収入に不相応な盛大な結婚式や新婦側が負う借金について叱責する。新郎の英語がパンジャービー語なまりであるのと対照的に、彼女の英語は実に流暢だった。「話している内容よりも、その自信と流暢な英語に、新郎やほかのいとこたちは度肝を抜かれた」(214)ほどだ。その結果、結婚式も無事完了し、新婦側の威厳を守った彼女は親戚一同から感謝されることになる。「英語」の能力が彼女自身の人生に大きく味方したのである。

そして最後にヒンディーは、これまでと同様、料理や衣服、親族名称や映画のタイトル、曲名などのローマ字表記が大半を占める。繰り返すが、主人公クリシュの地元はヒンディー語地域であるにもかかわらず、短い台詞ですらヒンディー語で書かれることも､「ヒンディー語で言った」という補足も一切ない。しかしながら見落とせない 1 語がある。先ほどの結婚式で危機を救ったアナ

ニャーにクリシュのおばが感謝する場面だ。「ありがとう、ねぇ。うちの威信を守ってくれて」(‘Thank you, beta. You kept our izzat.’) (216) 辞書にはizzat[9]の訳語としてdignity[10]やhonorなどがみられる。たとえそれらに置き換えてもさほど主旨は変わらないだろうが、ここでは原語が使われているのだ。それは、この言葉に独特の語感やあるいは重みがあるからではないだろうか。古くは初期の英語作家Mulk Raj Anandがパンジャーブ地方の農村を描いた小説*The Village* (1939)でも、一族の「威信」はizzatと表現されていた(115)。同じ言葉が、時代も場面も大きく異なる21 世紀の作品で、なおも英語に移されずに使われていることは興味深い。英語では代用できない、思い入れがそこには感じられるのだ。

次作 *Revolution 2020* (2011)では舞台がベナレスに置かれ、地方都市の生活が映し出される。物語の中心は小学校以来の同級生三人組で、大学進学や恋愛を経て、それぞれの道を歩んでいく。主人公は病身の父と二人で貧しい生活を送るが受験に失敗し、反対に成績優秀な親友は IIT への進学資格も得ながらも地元ベナレス・ヒンドゥー大学を選んだ、英雄的な人物である。残る一人の同級生が、この二人の間を揺れ動く美少女である。主人公は二年続けて大学受験に失敗し、父も亡くなり、失意のなか転機が訪れる。かねてから親族間で相続権を争っていた土地が、開発計画により値上がりする可能性が生じたのだ。地元の政治家が取り仕切る闇社会に身を投じた彼は、若くして GangaTech College の設立に携わり、自ら理事長となって地位と財産を手にする。一方の親友は大学卒業後ジャーナリストの道を進み、政治腐敗を厳しく糾弾する。主人公は手練手管を尽くし、同級生の女性との結婚まであと一歩のところで、良心を取り戻して彼女から手を引く。親友と彼女が結婚する場面で小説は終わっている。

---

9 パンジャービー語にもこれとほぼ同じ発音・意味の語があり、親戚のルーツからすればパンジャービー語である可能性もある。ここでは、在地語が英語に翻訳されない例として考えたい。

10 実際にアナニャーがクリシュの母にたいして自分の両親への敬意を求め、「うちの両親にだっていくらか尊厳があってもいいはずです」(‘they’d like some dignity.’) (228)と訴える場面もある。

この作品でもこれまでと同様、料理や衣服の名称、親族名称や映画についてローマ字表記のヒンディー語が使われている。しかしこれまでのように、デリーのような都会でもなければ、英語が得意な人々の世界ではない。つまり、ヒンディー語の比重はそれだけ大きくなっているはずである。なおも「ヒンディー語で」という明記はされていないが、ヒンディー語と判断できる場面は確実に増えている。たとえば主人公は、親しい渡し舟の船頭が外国人客と運賃の交渉をするとき、英語で手伝って手数料を受け取っている。ここからふだん船頭と主人公はヒンディー語で話していると想定できるのだ。またこの作品で新たに登場し始めるのが罵りの言葉である。いずれも地方議員の発言で、「……お前のろくでなしのおじの……」('... your harami uncle's ...') (127)や「州首相のクソッタレめ」('The CM is a behenchod,') (240)である。harami も behenchod も不適切な性的関係を含意する、猥雑な言葉である。文脈からはただ否定的なニュアンスが感じられるだけで、これらの語の意味は説明されていないため、ヒンディー語を知っている読者だけが理解することになるだろう。*Five Point Someone* では大学生が fuck という語を連発しているが、この作品では上のヒンディー語表現が使われており、たとえば bitch などの英語にも訳されていない。その理由は定かではないが、田舎の腹黒い政治家には、たしかに fuck や bitch よりもヒンディー語が似合っているといえるだろう。

以上の 2 作品でも、やはり終始「ヒンディー語」は明記されていなかった。対照的にタミル語にたいしては、原語を残しつつ、何らかの方法でその意味が伝わる工夫がなされている。ここで問いたいのは、ヒンディー語とタミル語の違いである。無論「ヒンディー語」が使われていないわけではなく、むしろ主人公＝語り手にとって近すぎ、明白すぎて、あえて言及する必要を感じなかったのではないだろうか。反対にタミル語は異質な世界であるからこそ、説明的にならざるを得ないのではないだろうか。つまり、全て「英語」で書かれていながらも、「ヒンディー語」世界は語り手の内部に、「タミル語」世界は外部にあるという位置関係が考えられる。そしてインド人でありながら「外部からの視点」を持つことこそ、インド在地語の作家とは異なる英語作家の特質とされてきたし、それをいかに英語で表現するかという部分にも作家の

オリジナリティが発揮されてきたのである。この後、バガトもいよいよ作品のなかで「ヒンディー語」に向き合うことになる。

ヒンディー語の登場——与えられた役割

最新作 *Half Girlfriend* (2015)には、詳細な検討が必要だろう。というのも、言語そのものが核をなしている作品だからだ。これまでとは一変して、「英語で言った」「ヒンディー語で言った」という表現も頻繁に使われ、さらにどんな英語・ヒンディー語なのかも重要な意味を持つようになる。使う言葉によってその人自身が判断され、言語能力が人生をも左右するような世界が描き出されていくのだ。

それではまず、英語を軸に物語を追ってみよう。インドで「最も後進的で」「最も貧しい」とされるビハール州出身の主人公マーダヴは、名門デリー大学セント・ステファン校にスポーツ推薦で進学する。冒頭の入試の面接は、英語が重視される世界への入り口でもある。英語でまともに受け答えができない彼にたいして、面接官の教授陣は文法の誤りを指摘するなど、態度は冷ややかである。彼はヒンディー語を使いたいと申し出るが、教授たちは英語で話すのが当然だという。実は彼らとしても、ヒンディー語で話すことを求められるのは好きではないという一面があるのだ。入学後も周囲の学生から英語の発音を笑われ、田舎者だとからかわれる。英語は学業のために必須であると同時に、流暢に、格好よく話すことが学生たちの間で人気の決め手ともなっていた。マーダヴのまさに対極にいるのがリヤーだった。デリーの都会で裕福な家庭に育ち、容姿端麗で英語に堪能な彼女は、手の届かない存在だと思われたが、意外にも親しみやすく、「半分ガールフレンド」の状態にまで達する。しかしある時マーダヴは興奮してヒンディー語で失言をしてしまい、間もなく彼女は去ってしまう。この発言については、後ほどヒンディー語の用例として検討しよう。卒業後、マーダヴは帰郷し、母親とともに学校の運営に苦心していたところ、転機が訪れる。マイクロソフト社の創立者で慈善家のビル・ゲイツがビハール州を訪れる予定で、うまくアピールできれば莫大な援助を受けられるという話が舞い込むのだ。ここで再び英語である。彼は近隣の町の英語学校に通いはじめ、そこでリヤーと運命的な再会を果たす。彼女の英語の手ほどきのおかげ

で、彼は見事マイクロソフト社から援助を受けることになる。地元の人々が歓喜にあふれるなか、突然リヤーは姿を消してしまう。その後彼女が隠していた過去を知ったマーダヴは、ニューヨークへと探しに行く。そこで奇跡的にリヤーを見つけることができたのも、またもや英語のおかげである。以上のようにあらすじをたどってみても、大学入学や事業資金、人生の伴侶探しにいたるまで、英語が彼の人生を切り開いたといっても過言ではない。他方ヒンディー語も初めて脚光を浴びることになるが、役割は大きく異なる。それではヒンディー語について検討してみよう。

これまでもローマ字で表記されてきた、料理や衣服、親族名称および呼びかけ、映画や音楽のに加え、この作品で目につくのは、videshi(外国人)やgora(白人)、firangi(西洋人)といった「外国人」を示す語彙である。いずれもビハールの人々が使用しているもので、文脈から「自分たちとは別世界の人々」というニュアンスが汲み取れる。前述のように、この作品には「ヒンディー語で言った」、さらには「ボージュプリー方言で言った」という表記が頻繁に現れるが、そこにはやはり登場人物の心理が合わせて描かれている。たとえば入試面接中にビハール州出身の若い面接官がマーダヴに話しかけた、「ビハール出身かい？」(‘Bihar se ho? Are you from Bihar?’ he said.) (10)[11]という一言などは、「照りつける夏の日の冷たい雨滴」(10)のように彼にとっては救いの言葉だった。またリヤーが携帯電話で母親とヒンディー語で話していることに気づくと、すぐに彼自身もヒンディー語で話したがる。同郷出身の学生も、英語で話せば「本物の」ステファン校生として通用する反面、実はマーダヴと同じくヒンディー語の方が好きである。このような例から、主人公にとって母語のヒンディー語はやはり落ち着けるものであり、同じ言語を話す人とは距離も縮まるようである。しかし一方で大切な人を傷つけ、悲惨な結果を招くのも、この小説でヒンディー語に与えられた役割である。先のマーダヴの失言とは、リヤーに無理矢理キスをしようとして拒絶されたときに、思わず発したものである。

---

[11] ちなみにこの作品のヒンディー語版では、この台詞は‘बिहार से हो?’ (5)となっている。

「やらせないなら失せろ」「何ですって？」僕は下品なボージュプリーなまりのヒンディー語で言った。内容は「愛し合おうよ、でなきゃ行ってくれ」だ。実際のところ、それでは上品すぎる。もし正直に訳さなければならないなら、こう言おう。「やらせろよ、だめなら出てけ」いや、それでも僕の言い方よりはずいぶんましだ。
(‘Deti hai to de, varna kat le.’ / ‘What?’ / I had said it coarse Bhojpuri-accented Hindi. I had said: ‘make love to me, or leave’. Actually, that sounds respectable. If I had to make an honest translation, I would say: ‘fuck me, or fuck off’. Hell, even that sounds way better than how I said it.) (75)

この台詞を衝動的に発したのは、それだけヒンディー語はより本能に近いものだといえるだろう。ここでの英語による説明は、単に意味を伝えるだけでなく、先述の文化紹介的な要素も含みつつ、また読み応えのある一節となっている。なおこの台詞をめぐっては、発売数日後にソーシャル・メディアで非難の声が上がっている [12]。この作品でのヒンディー語は、身近で心安い存在でありつつ、むき出しの人間の本性のはけ口でもある。理性的に、意図的に話される英語とは好対照をなしているといえるだろう。

以上、バガトの小説における「言語」をみてきた。大まかにいえば、時間の経過とともに、「ヒンディー語」を含む「インド在地諸語」の語彙が増し、表現方法も多様化の方向に進んでいる。初期の作品では言語名すら見当たらなかったが、次第に言語が意識的に描かれるようになっている。言語別に考えると、まず「英語」は学業や仕事といったいわば公的な領域と同時に、恋愛・友人関係といった私的な生活にもかかわり、アクセントまでもが意識される、インドの若者にとって不可欠なツールといえる。次に *2 States: The Story of My Marriage* におけるタミル語は、同じ「インド」でありながらも、ヒンディー語話者の主人公兼語り手から

---

12 "'हाफ गर्लफेंड' लॉन्च होते ही आलोचकों के निशाने पर आए चेतन भगत" (チェータン・バガト、『ハーフ・ガールフレンド』発売直後に批判集中) *दैनिक भास्कर* 9 October 2014.

みれば未知の外部世界に属する特殊な存在だった。そしてこの「異文化」を描く試みのなかで、作者はさまざまな表現をうみだしたといえるだろう。最後に登場する「ヒンディー語」では、ローマ字化された語彙を作品の順にたどると、料理や衣服、映画・音楽、呼びかけや敬称、さらに「外国人」を含み、増大していることが確認できる。さらに、izzat「威信」という概念、罵りの言葉や、極めて卑劣な台詞まで登場してきた。損得に直結する英語と対比して、ヒンディー語はより感覚的なものといえるだろう。このような変遷も、やはり作家自身の心の動きと無関係ではない。次に、バガト自身の関心や感覚をより直截に感じられる新聞コラムを考察したい。コラムを通して、小説の解釈もより深まるだろう。

ヒンディー語で書く——新聞コラムでの発信

これまでバガトはヒンディー語で小説を書いたことがない。映画の脚本は書いても、小説は書けないと自ら語っている[13]。小説のヒンディー語版も英語から翻訳したのは別人である。しかし反面で、ヒンディー語のコラムを精力的に執筆しており、内容もメッセージ性が強い[14]。小説のように語り手や登場人物を介するのではなく、本人名義のコラムは文字通り、彼自身により近い発言とみなしていいだろう。以降では、彼がヒンディー語で行っている仕事に焦点を合わせる。なぜ彼はヒンディー語で書くことを選んだのか、そして何をヒンディー語で書いているのだろうか。またそれらは英語小説とどのような関係にあるのだろうか。ヒンディー語の資料としてはコラムを中心にインタビュー記事なども交え、また英語のコラムおよびエッセイ集 *What Young India Wants*

---

13 "अब रूरल इंडिया में युवाओं की थिंकिंग जानेंगे यूथ आइकॅन चेतन" (若者のアイコン、チェータン：インドの地方で若者の考えに触れる方向へ) *दैनिक भास्कर* 2 May 2014.

14 *दैनिक भास्कर* のホームページ内では、ヒンディー語のブログが開設されているが、その他公式のウェブサイト(内部にブログを含む)、ツイッター、フェイスブックは英語である。またヒンディー語で発表されたコラムの英語版が、英語紙 The *Times of India* などに掲載されることもある。

(2012)と*Making India Awesome* (2015)[15]も適宜参照していく。

ヒンディー語で書くきっかけは 2008 年、ヒンディー語新聞ダイニク・バースカル(*दैनिक भास्कर*) からの執筆依頼だった。当時を振り返り、彼はこう述べている。「英語作家がヒンディー語で書くことは考えられないことだった。英語は、ことに作家は、特にエリート主義と決まっていたから」(*WYIW* xix)。それほど異例な仕事ではあったが、バガトは「運命」と捉えて快諾する。というのも同紙は何千万もの読者を持っており、「ヒンディー語読者が多数者すなわち本当のインド(the real India)に到達するチャンスを与えてくれた」からである（*WYIW* xix)。すでに莫大な数の英語読者を獲得しながらも、さらに規模の大きいヒンディー語読者を彼は意識しており、そこにヒンディー語で執筆する理由があることが分かる。同時にこの言葉からは、それまでの成功にもかかわらず、彼が「本当のインド」に到達したと感じていなかったことが推察できる。

ではそのコラムで、彼は何を書いているのだろうか。これまでに取り上げられたテーマは、政治や教育、若者の就業や女性のキャリア、IT化や公害など、実に多岐にわたる。また選挙などリアルタイムな話題に言及しているのも特徴的だ。これらすべての根底にあるのは「よりよいインド(a better India)」（*WYIW* xvii)という大目的である。とりわけ若者を重視している彼は、「若者を目覚めさせたい」(मैं चाहता हूं कि यूथ को मैं अवेयर करूं।)[16]といった類の発言も繰り返している。小説世界では、主人公の若者が意中の美少女の言動に一喜一憂する姿が前面に押し出され、一見コミカルな印象を与えているが、彼らが学業や仕事、結婚などに奮闘しているのもたしかに事実である。コラムで論じられている社会的な諸問題も、実は小説に組み込まれているものだ。文章に温度差はあるが、小説でもコラムでもテーマはかなり重なっているのである。

---

[15] 以下、*Making India Awesome* からの引用では書名を *MIA* と省略する。

[16] "चेतन भगत ने दिए सफल होने के लिए खास टिप्स और बताया अपना गोल" (チェータン・バガトが語る、成功へのコツと彼自身の目標) *दैनिक भास्कर* 02 Feburary 2014.引用した一文では、若者(ユース)、目覚めた(アウェア)という語に英語が使われている。

これらに加えて、ここでじっくり検討したいのは、文学や言語、自身の作品に言及しているコラムである。「書くこと」についての彼の考えに、さらに近づいてみよう。

まず最初にヒンディー語文学にかんする発言を取り上げたい。バガトはヒンディー語で小説を書けないというが、書く以前にそもそもあまりヒンディー語文学に触れていないようだ。プレームチャンドくらいしか読んだことがないとも語っている[17]。つまり、小説が書けない一因を、ヒンディー語文学の経験が欠けているという背景にも求められるのではないだろうか。次のような、ヒンディー語の書物にたいする厳しい視点も彼は明かしている。「ヒンディー語で書かれた本が読者に届かないのは、話し言葉との間に若干ずれがあるからだ」(हिंदी में लिखी जा रही किताबें पाठकों तक इसीलिए नहीं पहुंच पा रही हैं, क्योंकि उनकी भाषा शायद बोलचाल की भाषा से थोड़ी हटकर है।)[18]。たしかに彼の作品ほど売れた小説は、ヒンディー語にも、他のインド在地諸語にも存在しない。しかし読んでいないのなら、この判断もまた早計ではないだろうか。同様の姿勢は、彼自身の作品の翻訳段階でもみられる。当初の翻訳者は、古いスタイルで、難解なヒンディー語を使いており、日常会話のヒンディー語とは別物であった。彼の希望にかなう、若手の翻訳者を見つけるまで、翻訳者を探すのに苦労したという[19]。結果として彼の眼鏡にかなったヒンディー語版をみると、IITの学生の台詞には大量に英単語が含まれており、'I love you'という台詞は英語のままデーヴァナーガリー文字で書かれている。英語交じりのヒンディー語は今日珍しいものではないが、現実に近ければ近いほど優れた文学といえるだろうか。これについては、後ほど言語の面からも考察することにしたい。いずれにせよ、バガトにとってヒンディー語文学

---

[17] "मज़ाक उड़ाना है तो उड़ाओ: चेतन भगत" (笑いたければ笑え：チェータン・バガト) *दैनिक भास्कर* 18 August 2014.

[18] "हिंदी पर बोले चेतन भगत, भाषा की शुद्धता पर जोर हमें प्रवाह से काट देगा" (チェータン・バガト、ヒンディー語を語る：言語の純粋さへのこだわりは孤立への道) *दैनिक भास्कर* 14 September 2015.

[19] "हिंदी पर बोले चेतन भगत, भाषा की शुद्धता पर जोर हमें प्रवाह से काट देगा" (チェータン・バガト、ヒンディー語を語る：言語の純粋さへのこだわりは孤立への道) *दैनिक भास्कर* 14 September 2015.

は決して身近なものではなく、自身の小説をヒンディー語で書くという選択肢はあり得ないようだ。

では、バガト自身は作家としてどのようにみられているのだろうか。ヒンディー語の小説家カーシーナート・シン(काशीनाथ सिंह)の次の言葉は、バガト批判の典型といえるものだろう。「チェータン・バガトは通俗作家である。創作には真剣さが必要なものだが、それが彼の仕事にはみられない」(चेतन भगत एक बाजारू राइटर हैं, राइटिंग के लिए गंभीरता की जरूरत होती है और वह उनके काम में दिखती नहीं है।)[20]。しかしバガト自身もこのような批判は承知のうえで、「たとえ馬鹿らしい、能なし作家と言われても、人々が本を買って読んでいてくれる限り、幸せだ」との見解を示し (चेतन भगत मानते हैं कि जब तक लोग उनकी किताबें ख़रीदकर पढ़ते रहेंगे वो ख़ुश हैं. भले ही उन्हें लोग बेतुका, बिना दिमाग का लेखक कहते रहें.)[21]、さまざまな仕事のなかでも一番好きなのは作家業だと発言している[22]。彼自身が文学的評価よりもむしろ読者を強く意識していることは、ある小説の謝辞で述べた「インドで最も称賛される作家ではなく、最も愛される作家になりたい」という言葉からも明らかだ[23]。

次に注目したいのが、言語についての彼の考えである。ここでは英語とヒンディー語の両方を考察し、比較してみよう。まず英語にたいするバガトの態度は、おおむね肯定的だといえる。グローバル化、デジタル化の時代において英語は必須であり、小説と同様にコラムでも、英語が職の機会と社会での尊敬をもたらし、情報および娯楽の新しい世界を開くという認識を示している。しかし一方で普通の人々が英語に触れるようになった現在、どんな

---

[20] "टीवी डिबेट के दौरान मशहूर शायर मुनव्वर राणा ने लौटाया अकादमी अवॉर्ड" (テレビ討論中、著名な詩人ムナッワル・ラーナー、サーヒティヤ・アカデミー賞を返還) *दैनिक भास्कर* 19 October 2015. シンの発言の背景には、ある出来事をめぐって、バガトが先にシンを批判したという経緯がある。

[21] "मज़ाक उड़ाना है तो उड़ाओ: चेतन भगत" (笑いたければ笑え：チェータン・バガト) *दैनिक भास्कर* 18 August 2014.

[22] "लिमिट से आगे बढ़ना और मंजिल को पाना ही Real Success" (限界の先への到達こそリアル・サクセス) *दैनिक भास्कर* 4 August 2014.

[23] *The 3 Mistakes of My Life* [ix]

学校で学んだ英語であるか、また発音や語彙など英語の質によって、優劣を競い合う風潮があると指摘し、この「新たなカースト制度」(नई जाति व्यवस्था)をあってはならないものだと力説する [24]。*Half Girlfriend*の主人公マーダヴを擁護するかのような立場である。また、とどまるところを知らない英語の勢いにたいして、表立った批判はしないが、ある種の脅威を感じているようだ。ヒンディー語の発展を期した文脈ではあるが、「何もしなければ英語の攻撃によってさらに瀬戸際に追いやられる恐れがある」(अन्यथा उसके सामने अंग्रेजी के आक्रमण के आगे हाशिये पर जाने का जोखिम बना रहेगा।)という一節には危機感がうかがえる [25]。

この発言からも分かるように、バガトはヒンディー語にたいしては現状を憂い、衰退から「救おう」とする姿勢を示している。そこで彼が実際に提案したのは、大胆な対抗策だった。そのコラム「ローマ字ヒンディー語はいかが？」(“रोमन हिंदी के बारे में क्या ख्याल है?”) を取り上げてみよう。要するに彼の提案は、デーヴァナーガリー文字をやめローマ字表記を採用せよ、というものである。利点として、ローマ字は普遍的なものであり、コンピュータや携帯電話でも便利だという実用性に加え、さらに、国民を結びつける効果を謳っている。ローマ字を使えば、英語とヒンディー語が近づき、また他のインドの在地諸語同士がたがいに、そして英語ともより結びつきが強まる(इससे अंग्रेजी और हिंदी भाषी निकट आएंगे। साझी लिपि होगी तो अन्य क्षेत्रीय भाषाएं भी एक-दूसरे से और अंग्रेजी से अधिक जुड़ सकेंगी।)としている。この奇抜な提案にたいする反対意見もまた、彼は織り込み済みである。そのうえで彼が批判するのは、反対勢力が守ろうとするヒンディー語の「純粋性」(शुद्धता) [26]である。バガトはこれに対抗して、「言語というものは時とともに、変化を伴って発展していくもの」(भाषाएं समय के साथ रूपांतरण सहित विकसित

---

[24] "देश में अंग्रेजी की नई जाति व्यवस्था" (インドにおける英語の新たなカースト制度) *दैनिक भास्कर* 7 August 2014.

[25] "रोमन हिंदी के बारे में क्या ख्याल है?" (ローマ字ヒンディー語はいかが？) *दैनिक भास्कर* 8 January 2015.

[26] "हिंदी पर बोले चेतन भगत, भाषा की शुद्धता पर जोर हमें प्रवाह से काट देगा" (チェータン・バガト、ヒンディー語を語る：言語の純粋さへのこだわりは孤立への道) *दैनिक भास्कर* 14 September 2015.

होती हैं।)と唱える。しかしながら、このローマ字化提案は明らかに未熟なものである。まず、ヒンディー語の全ての文字および発音を 26 のローマ字で表記できるのかという単純な問題が生じる。それに、ローマ字化することによって、言語同士が近づくのだろうか。近づくとは、一体どういう状態を指すのだろうか。いずれにせよ、折衷主義的で、ユートピア的発想といわざるを得ない。少なくとも、彼の小説のようにハッピーエンドで終わるような、単純な問題ではないだろう。

ところで、彼自身が使っているヒンディー語はどのようなものだろうか。コラムは文体の面からみると、シンプルな構文で読みやすいという点は小説の英語と共通すると思われる。また IT 関係などの用語が英語に偏ることはあっても、語彙にもさほど目立った特徴はない。しかし話し言葉では大きく異なり、英語が多用される。参考として、あるインタビューを日本語に訳し、英語部分にカタカナを当ててみよう。話題は、大学時代の友人との付き合いについてである。

> 多くの友人はというと、フェイスブック・フレンドにとどまっています。私もとてもビジーにしていますし、私のライフは異なるターンを切ってしまいましたから。タッチしている何人かはボンベイに住んでいて、ほかは離れてしまいましたね。皆をとてもミスしていますが、話もできません。いつかは皆に会うつもりです。
> (बहुत सारे दोस्त पर तो सिर्फ फेसबुक फ्रेंड बनकर ही रह गए हैं। बहुत बिजी रहता हूं, मेरी लाइफ एक अलग ही टर्न ले चुकी है। कुछ टच में है, जो बॉम्बे में रहते हैं, बाकी अलग हो गए हैं। उनको बहुत मिस करता हूं, पर बात नहीं कर पाता। किसी दिन सबसे मिलूंगा।)[27]

このような平易な話題で、ビジー(busy)やライフ(life)といった日常的語彙にすら英語が使われているのだ。バガトの唱えるローマ字化を実施すれば、ヒンディー語への英語の語彙の流入はさらに加速するだろうが、それを「言語が近づいた」と歓迎すべきかど

---

[27] "लिमिट से आगे बढ़ना और मंजिल को पाना ही Real Success" (限界の先への到達こそリアル・サクセス) *दैनिक भास्कर* 4 August 2014.

うかは疑問である。

さて最後に、近年頻繁にコラムに登場している、もうひとつのテーマである「インドの地方」(रूरल इंडिया)に触れておきたい。それは最近の関心事ではなく、2008 年に彼がヒンディー語コラムの執筆を承諾した時点から追い求められていたものである。先述のように、バガトは「多数者すなわち本当のインド(the real India)」に到達するためにヒンディー語で執筆を始めた。「本当のインド」にかんしては、同年に発表された*The 3 Mistakes of My Life*のなかにも「小さな町にまつわるおかしなことは、人々がこれぞ本当のインドと言うことである」(A funny thing about small towns is that people say it is the real India.) (8)という一文がみられる。ここでは「町」とされているが、この時点で、バガトが大都会は本当のインドではないと認識していたことが分かる。そして彼は都市を数々訪れた後、大多数の若者は地方にいるのだから、「自ら村落に出向いて彼らの考えていることを知りたい」(वे ग्रामीण क्षेत्रों में जाकर उनकी सोच को जानना, समझना चाहते हैं।)[28]と語った。現在では「ヒンディー語地域の小都市から最も声のかかる唯一の英語作家」(मैं ही अंग्रेजी का एकमात्र ऐसा लेखक हूं, जिसे हिंदी भाषी छोटे शहरों में इतना ज्यादा बुलाया जाता है।)[29]と自覚するに至っている。この間「本当のインド」を求めて、彼の視点は都会から地方へ、少数のエリートから大多数の庶民の世界へ移り変わり、ビハール州に行き着いた。そして、*Half Girlfriend* が生まれたのだ[30]。この変遷に沿って、小説における言語の扱いにも変化が生じていたのだ。初期の作品では、言語名を特定する必要さえなかったが、ビハール州の若者を、「本当のインド」を描こうとするとき、ヒンディー語に向き合わざるを得なかったのだ。

---

[28] "अब रूरल इंडिया में युवाओं की थिंकिंग जानेंगे यूथ आइकॅन चेतन" (若者のアイコン、チェータン：インドの地方で若者の考えに触れる方向へ) *दैनिक भास्कर* 2 May 2014.

[29] "हिंदी पर बोले चेतन भगत, भाषा की शुद्धता पर जोर हमें प्रवाह से काट देगा" (チェータン・バガト、ヒンディー語を語る：言語の純粋さへのこだわりは孤立への道) *दैनिक भास्कर* 14 September 2015.

[30] "लिमिट से आगे बढ़ना और मंजिल को पाना ही Real Success" (限界の先への到達こそリアル・サクセス) *दैनिक भास्कर* 4 August 2014.

バガトが見つめるインドの現在

ここで改めてヒンディー語を軸に、バガトのこれまでの仕事を振り返ってみよう。小説では、次第にヒンディー語が前景化されていく大きな流れが認められた。初期の作品世界にヒンディー語が皆無だったわけではないが、あえて「ヒンディー語で」と明言する必要もなかったのだ。しかし、作品のテーマにおいても、タミル語世界というインドにおける「外部」を取り上げ、徐々に言語を意識し、言及せざるを得ないものに変化してきた。そして最新作 *Half Girlfriend* ではビハールという「地方」に到達し、いよいよヒンディー語は表舞台に登場することになった。彼がヒンディー語の仕事を通じて目指していた、「本当のインド」と合致したのである。この間彼自身の関心が、都会から地方へ、一握りのエリートから無数の大衆へと変化してきたことは、コラムでみてきた通りである。

バガトの仕事を通して、彼がいかに時代を先取りし、読者を意識しているかが分かった。性急な提案もみられるが、「私は解決策を提示せずにエッセイを書いたり、インドの問題を論じることは決してない」(*MIA* 15)という方針の表れでもあり、抽象的な思索に終わらないのは彼の個性でもある。その彼の目に今インドはこのように映っている。「ヒンディー語媒体で学んだ子どもたちが今日国を動かしている」(हिंदी मीडियम में पढ़े वही बच्चे आज देश चला रहे हैं।)[31]。英語使用者の優位は終わり、新しい時代を彼はいち早く感じているようだ。さらにその先に、ヒンディー語にはどのような未来が待っているのだろうか。今後もチェータン・バガトの英語小説のみならず、ヒンディー語での仕事、そして社会へのアプローチから目が離せない。

---

[31] "बड़े होकर STD बूथ खोलना चाहते थे चेतन भगत, घरवालों को भी नहीं थी उम्मीद" (将来の夢は STD ブースの開設だったチェータン・バガト、家族も期待せず) *दैनिक भास्कर* 31 October 2015.

使用テキスト
英語
Anand, Mulk Raj 1954 (1939). *The Village*. Bombay: Kutub Publishers.
BBC Hindi (http://www.bbc.com/hindi 2016 年 1 月閲覧)
Bhagat, Chetan 2010 (2004). *Five Point Someone*. New Delhi: Rupa.
--- 2005. *One Night @ the Call Center*. New York: Ballantine Books.
--- 2008. *The 3 Mistakes of My Life*. New Delhi: Rupa.
--- 2013 (2009). *2 States: The Story of My Marriage*. New Delhi: Rupa.
--- 2011. *Revolution 2020* . New Delhi: Rupa.
--- 2012. *What Young India Wants*. New Delhi: Rupa.
--- 2014. *Half Girlfriend*. New Delhi: Rupa.
--- (tr. Saktavat, Susobhit) 2015. *Half Girlfriend*. New Delhi: Rupa.
--- 2015. *Making India Awesome*. New Delhi: Rupa.
The New York Times (http://www.nytimes.com/ 2016 年 1 月閲覧)
ヒンディー語
दैनिक भास्कर (http://www.bhaskar.com/ 2016 年 1 月閲覧)

＊小稿でのヒンディー語部分には、ड़ であるべきところが ड़ となっているなど、いくつか例外的な表記が含まれている。これらは引用であるため、原文のまま記載したことをお断りしておく。